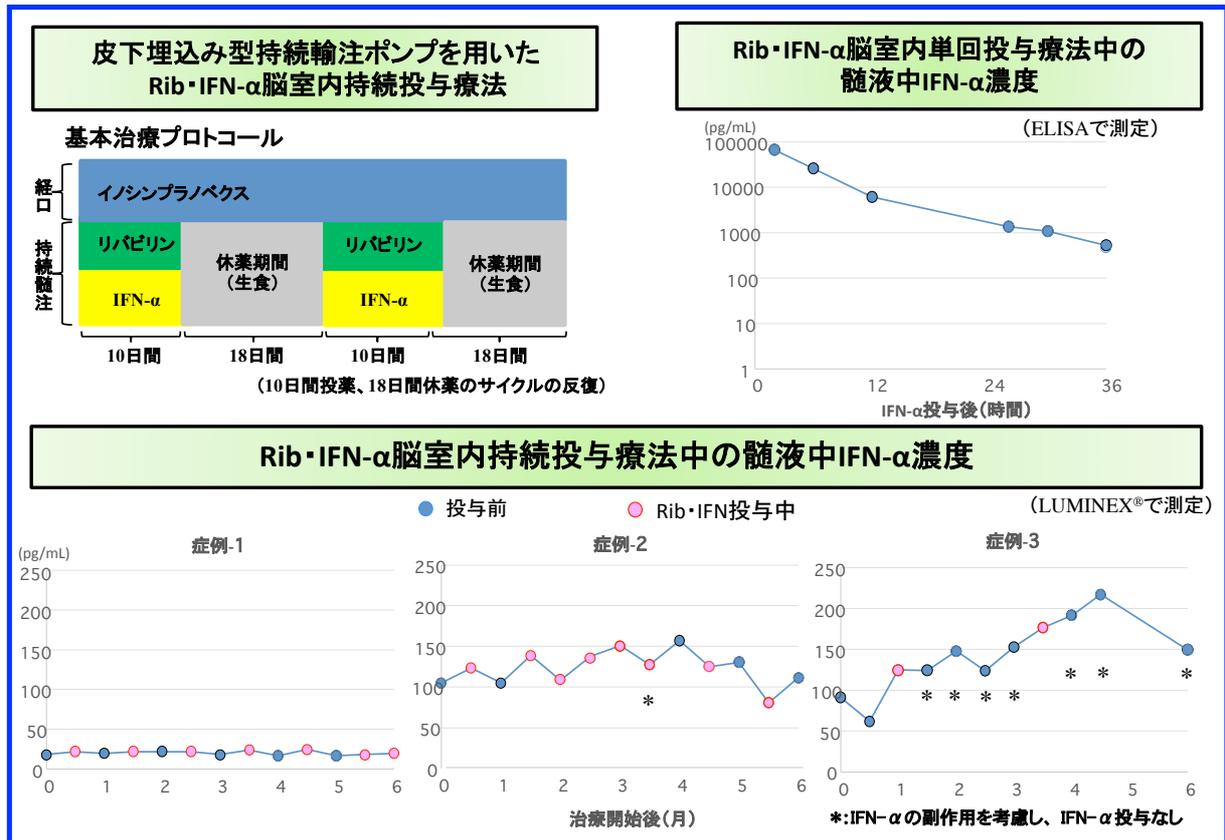


リバビリン・IFN- α 脳室内持続投与療法における髄液中IFN- α 濃度

研究開発分担者： 福島県立医科大学 小児科学講座 細矢光亮



解 説

1. 亜急性硬化性全脳炎(SSPE)は国内外ともに有効な治療法はなく、その確立が切望されている。当施設でのSSPE治療プロトコールは、イノシプラノベクス内服とリバビリン(Rib)・IFN- α 脳室内投与である。3症例に実施した皮下埋込み型持続輸注ポンプを用いたRib・IFN- α 脳室内持続投与療法では、髄液中Rib濃度は治療域濃度の50-200 μ g/mLを維持することができ、重大な副作用はなかった。
2. Rib・IFN- α 脳室内持続投与(3症例)での投与前と投与終了直後の髄液中IFN- α 濃度をLUMINEX®にて、脳室内単回投与での髄液中IFN- α 濃度をELISA法で測定した。
3. 髄液中IFN- α 濃度は単回投与では投与直後に高濃度に達したが、持続投与療法では治療開始前と同程度で低値が持続した。
4. Rib脳室内持続投与療法を安全かつ有効に実施するために、IFN- α の投与方法の検討、症例の集積が必要である。